Japanese Journal of Applied Psychology
1991, No. 16., 1-9

原　著

家族の相互の呼び方から見た日本の家族関係の特徴

小　川　隆　章*

THE CHARACTERISTICS OF JAPANESE FAMILIES VIEWED FROM THEIR TERMS FOR ADDRESS AND SELF-REFERENCE

Takaaki OGAWA

A questionnare was administered to university students and they answered about the terms of address and self-reference uesd in their families when they were children and in recent time.

The analyses of their responses confirmed following hypotheses.

(1) Mother addresses her first-born child by the kin terms viewed from the youngest child more than the father.

(2) The wife addresses her husband by the father term more than the husband uses the mother term to addresses her.

(3) The husband living in a three generations family uses the mother term when he addresses her wife less than the husband living in a nuclear family.

(4) The husband who addresses his wife by the mother term tends to address his first-born child by the kin terms viewed from the his youngest child more than the husband who ueses less frequently the mother term to his wife

(5) Elder siblings who are addressed by their kin terms from their younger siblings are called more frequently by the same manner from their parents too.

(6) Elder sisters use the kin term viewed from younger siblings to refer themselves more than elder brothers when they talk to younger siblings.

問　題

たまたまあるイギリス映画の冒頭の場面で若い女性とその母親と同じくらいの年齢と思われる中年女性が親しげな会話をしていた。2人は互いに相手を「あなた」と呼び，日本語の字幕でも「あなた」と訳していた。これを見た時，筆者は年上の女性が若い女性の母親なのだろうか，もしそうだとすると娘から母親に対する「あなた」は「お母さん」と意訳してしまった方が日本語としては自然なのではないかという疑問を持った。しかし同時に，それとも，たとえ年上の女性が母親であるとしてもストーリーの展開の上ではまだそのことを観客に正確には明示しない方が良いから，あえて「あなた」と直訳しておくのだろうか，と推測したりしたものである。「あなた」という言葉はもともとは尊敬表現の程度の高い代名詞であったようであるが，今日では同輩，あるい

*皇学館大学
Kogakkan University

は目下の者に呼びかける尊敬語ということに用法が限られている（大石 1986，南 1987)。子が親に対して，部下が上役に対して，若い人が年長者に対しては使いにくい。蓮実（1986）は日本語とフランス語の二ケ国語を母国語として育った5歳の息子から「あなた」とよばれたときの「衝撃」を詳しく記している。この点については，我が国と歴史的にも文化的にも関係の深い隣りの国の韓国でも同様であるようだ。ヤン（Yang，1986，p. 42-43）は，韓国語では年長の親族に対しては第2人称代名詞「あなた」の代りに親族名称を使わなければならないので，ヨーロッパ語に比較して面倒であり，不便であることを述べている。また彼は，日本語では3人称代名詞「彼」「彼女」を近代になって使い始めたが，韓国語では適切な用語が無いことを指摘している。しかし，日本語でも家族のことを彼とか彼女という言及の仕方は会話の中で使われることはまず無いであろう。父親にかかってきた電話に息子が「彼はまだ帰宅していません」などという言い方は英語や中国語では普通であるが，韓国語や日本語では不自然である。そこでも代名詞の代りに親族名称（家族内でいう場合と他人に対していう場合で異なるが）が使われる。さらにまた日本の社会では話し手が自分のことを称する用語についても特徴がある。それはいわゆる一人称代名詞といわれるものがゆうに20を越す（森本 1988，p. 96）ことである。話す相手や場面により適切に使い分けることが要求される。このような日本の社会における自分，相手，第三者をあらわす用語の使い方の特徴は我が国の家族の人間関係あるいは社会一般の人間関係の特徴と関連しているのではないだろうか。鈴木（1972）は，いわゆる人称代名詞を含め，自分，相手および第三者を指す用語をそれぞれ自称詞，対称詞，他称詞と呼び，日本人のこの使用法は基本的には家族内における対話パターンの拡張と見なすことが出来るとしている。彼は日本の家族内における自称・対称の仕方の原則として「①年上の親族に対しては相手を指すことばとして人称代名詞を使わず，親族名称を使用する。これとは逆に年下の者には人称代名詞や名前を使用する。また自分をさすことばについては年下の者には相手から見た親族名称で自分を称することができるが，年上の者には自分の名前で自称することができる。②一度自分を最年少者の位置に置き，そこから他の家族員を親族名称で呼ぶ」の2つが存在することを考察した。後者は具体的には子どもを持つ夫婦が互いに「お母さん／お父さん」と呼び，父母が一番上の子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶなどのことをさしている。

ところで，実証的に日本の家族内での自称，対称の仕方を調査した研究結果を見ていくと，まず渡辺（1978）は，都内の約100人の既婚男性に質問紙調査を行ない，（a）家族全員で食事をしているとき，（b）妻と二人で食事をしているとき，（c）隣りのへやにいる妻を呼ぶとき，何んといって妻を呼ぶか，（d）さらに子どもが生まれる前は同様の場面でどう呼んでいたか，について回答を求めた。（a）と（c）については子どもの有る家庭と無い家庭に分けているが，（b）については全回答者の中から夫婦2人だけの家族のみを集計から除いてある。つまり子どもが居ないけど，夫か妻の父母もしくはきょうだいが同居している者を含めているので，（a）と（b）の正確な比較はできないが，前者の場面では“おかあさん”もしくは“ママ”という呼び方が子どものいる家庭の8割ほどで使われるのに対して，後者の場面では半分以下になった。これに対して直接妻の名前を呼ぶ比率は複数回答も含め前者で2割ほどあるが，後者では1.5倍に増加，“君／お前／あなた”などの人称代名詞も十数%から30数%に増えていた。（c）の子どもの生れる前は当然“おかあさん”というような呼び方はなく，名前や人称代名詞や“オイ”とか“アノウ”などの応答詞が使われる。一方，妻が夫をどう呼ぶかについて，言語生活の編集部（1973）は東京の山手と下町の2つの幼稚園の園児の母親117人と国語研究所の職員の家族41人に質問紙調査によりいくつかの場面での妻の夫に対する呼びかたについて回答を求めた。主な結果は，（a）夫と2人だけでの時に比べて，子どもがそばに居るときの方が夫を“おとうさん”とか“パパ”（これらの呼び方を父称としてまとめている）と呼ぶことが多い。しかし子どもの居ない場面でも名前を呼ぶことは多くない。夫と2人だけで外出して街の人ごみの中で大声で夫を呼ぶときでも，その父称や“あなた”よりもずっと少ない。子どものいない夫婦でも妻が夫を父称では呼ばないけれど“あなた”と呼ぶことが多く，名前で呼ぶことは同様に少なかった。他の者との話の中で夫を話題にする場面を見ると，親友や自分の母親と話すときは夫のことを“お父さん”とか“パパ”ということが多かった。ただし夫の母親には他の相手とは違い夫を名前で言及することが多少見られた。

また津留（1956）は，関西地方の4種類の地域（住宅地，商業地，工業地，農村）の小学校5年生500人に面接調査を行ない，彼等の家庭の中で家族同士がどう呼びあっているか尋ねた。もし呼び方が2つ以上ある場合は最も普通に多く用いられる方を集計に入れた。夫から妻に対する呼び方で最も多いのは「名前の呼び捨て」45%，ついで「お母ちゃん・お母さん」29%であった。一

方，妻から夫に対しては「お父ちゃん・お父さん」が73％と最も多かった。子どもを含む呼び方については子どもごとに回答を得ているので世帯数より多くなっている。下の子から兄姉を呼ぶ仕方はともに70％が「お兄ちゃん／お姉ちゃん」およびそれに似た呼び方であった。兄姉から弟妹の呼び方は兄と姉で多少違いが有るようであった。兄は弟妹を「呼捨て」で呼ぶ者が7割前後であるが，姉は55％～60％くらいであった。ところが，筆者の問題意識から残念に思えるのは父母が長子を名前で呼ぶか，あるいは“お兄ちゃん／お姉ちゃん”と呼ぶか全く何も言及していないことである。子どもを長子と他の子どもたちと区別せず全体で集計していて，「比較的単純なので表示は略すが～」と述べ，父の8割余，母の7割弱が名前の呼捨てであり，他は名前にちゃん付けと略称や愛称「あるいはきょうだい同士の呼び方を父母もそのまま使っている場合」が若干あったと報告している。この「きょうだい同士の呼びかた」の中に“お兄ちゃん／お姉ちゃん”を含めているように見える。また，この研究ではそれらの家族の呼び方のあいだの相互関係について何も言及されていない。つまり弟妹が兄姉を名前で呼ぶか，それとも“お兄ちゃん／お姉ちゃん”と呼ぶかということと，彼等の父母が長子をどう呼ぶかということと関連しているのかどうか。また，長子を呼ぶ仕方と夫婦の間の呼びかた（夫が妻を名前で呼ぶか“お母さん”というような呼び方をするか）と関連があるのかどうか，という問題が検討されていない。

次にベフとノーベック（Befu & Norbeck, 1958）は，カリフォルニア大学に留学中の男女10人ずつの日本人学生に対する面接調査とベフ自身の日本での生活経験に基づき，日本人の家族の間での呼び方と自称の仕方についてまとめた。ここでも津留と同じく親から子どもの呼び方として長子と下の子どもとの区別をせず論じている。彼等は家庭外の他人に自分の家族員のことを言及する言い方と直接の会話でなくて書簡における自称・対称の仕方についても調査している。さらにフィッシャー（J. L. Fischer, 1964）は，福岡市に住む41家族の主として主婦に面接調査を行ない，各家族員の間で相手をどう呼び，自分を何んと称するかについて回答を得た。自称および対称の主なタイプを①代名詞，②親族名称，③年齢・地位名称（age status terms），④名前，⑤zero forms の5つに分類した。③の age status terms としてはボーヤ，ボーズを挙げている。この言葉は年上の家族が男の子を呼ぶとき使い，男の子自身が自分を指す言葉として用いるとしているが，この後半の記述（自称の用語としてボーヤもしくはボーズが使われるという部分）は事実ではないように筆者には思われるのだが。また⑤の zero forms というのは相手を呼ぶときは上で応答詞と分類されている“オイ”とか“ネエ”というような言葉であるが，自分をさす場合もこの zero forms は有るとしている。実例として息子夫婦と同居している老婦人が孫と話すときは自分のことを“おばあちゃん”と呼ぶが，若夫婦と話すときはいかなる用語も使わない（つまりワタシというような主語を省略して述べる）ことを挙げている。そしてこれを無能力感に由来する自己卑下の現れであると解釈しているが，これは勘違いではないだろうか。フィッシャーは典型的なひとつの家族を例に挙げ詳しく説明しているのであるが，複雑さを避けるためか，夫婦と子ども一人の家族を取上げている。したがって父母が長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」という呼び方をするかどうかという点については何も言及していない。

そこで筆者（小川1991）は，この点についても資料を得られるような質問紙調査を行なってみた。3つの大学の学生に質問紙調査を実施し，各自の小中学生時代を回想して，当時の家族の中での相互の呼び方について回答することを求め，344名の回答を集計した。両親が一番上の子をどう呼ぶかについて自由記述してもらったところでは，「実名（呼捨て）」，「実名＋ちゃん，愛称」の順に多く，「お兄ちゃん／お姉ちゃん」がそれについでいたが，複数回答が多く，他の呼び方と併用している家庭がすくなくなかった。さらに，「ご両親はあなたがたきょうだいの兄／姉を“お兄ちゃん／お姉ちゃん”と呼ぶことがありましたか」に対する多肢選択の回答を見ると，「いつもそう呼ぶ」，「かなり多くそう呼んだ」，「ときどき」，「たまに」の4個の選択を合計すると全体の約3分の2になり，残りの3分の1が「ほとんど無し」および「全然無し」の回答であった。回答者が子どもの頃と年齢18歳以上の大学生になった現在との違いについては大部分が「なし」であった。一部の「違いがある」という回答も「父母のことをお父ちゃん／お母ちゃんから～さんというようになった」，「両親が私を“兄ちゃん”か実名で呼んでいたのが実名一本になった」，「父と母の間で実名で呼ぶことが無くなった」等の比較的小さな変化が有ることを述べていた。次に，この調査の中で自称詞について「自分のことをボク／ワタシという代りに名前や愛称で称した」ことが有るかどうか質問した。男子ではごくわずかだったが，女子では半数以上がこのようないい方をした経験が有り，現在でも主として家族や親しい友人仲間に対して使うという回答も少なくなかった。また筆者は，これらの結果と比較するため，韓国の各地で少数の大人に面接して同様のことを調査した。前

述の鈴木の二つの原則のうち一番目の方は韓国でも類似した結果であった。ただし，自称詞としては名前や愛称を用いることはあまりなく，第一人称代名詞を幼いときから使用していた。また，もう一つの「他の家族員を最年少者から見た親族名称で呼ぶ」ということは韓国人にはまず当てはまらず，日本人に特有の特徴であることが確認された。

今回はこれら先行研究の結果に基づき，さらに数量的な把握をしたい。具体的には次のような仮説を設け検討してみたい。

1. 父親と母親では母親の方が長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶことが多いだろう。回答者が大学生になった現在でもこの傾向は持続しているだろう。また名前で呼ぶ場合でも呼捨ては父に多く，母は名前にちゃん付けや愛称で呼ぶことが多い。つまり一口でいって，母親の方が「やさしい」呼び方であろう。

2. 妻が夫を「お父さん」と呼ぶことの方が夫が妻を「お母さん」と呼ぶことよりも頻繁であろう。ただし，夫婦の間の呼び方に関連があるだろう。つまり，妻が夫を名前でなく，父称で呼ぶことが多い家庭では夫の方からも妻を母称で呼ぶことが多いだろう。

3. 夫が妻を「お母さん」と呼ぶことは夫の実母または義理の母親（回答者の祖母）が同居する家庭では同居していない家庭よりもすくないだろう。

4. 妻を「お母さん」と呼ぶことの多い夫はすくない夫よりも長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶことが多いだろう。

5. 父母が長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶことが多い家庭の方がすくない家庭よりも弟妹が兄／姉を名前であく「お兄ちゃん／お姉ちゃん」とよぶことが多いだろう。

6. 兄の場合よりも姉の場合の方が弟妹に対して自分をワタシという代りに「お姉ちゃん」ということが多く，この性差は大人になっても持続するだろう。

方　法

愛知県および三重県内の３つの大学（国立１校，私立２校）の学生に質問紙調査を行ない，各自の子ども時代を回想して，当時の家族の中での相互の呼び方について回答するとともに，現在の呼び方についても回答することを求めた。回答には性別，年齢，子どもの頃の居住地，家族構成を求めた。回答者は自分がどう呼び，どう呼ばれたかでなく，家族員が他の家族員をどう呼んだかについて主として回答することを求められた。両親がそろっている者303名の回答を集計に用いた。ただし，１人っ子の者14名の回答は上記仮説の (2) と (3) についてのみ使用したほか，一部の質問項目に記入漏れのある回答はその項目に関連する集計からは除いた。表１は303名の回答者のきょうだい数，出生順位と性別ごとの人数である。

結果と考察

(1) 弟妹から兄姉の呼び方

前回の調査では「きょうだいの中で年下の者（弟妹）から年上の者（兄姉）をどう呼んでいたか」と質問したのであるが，今回はその結果に基づき，お兄ちゃん／お姉ちゃん，名前（呼捨て），名前＋ちゃん，名前＋くん，愛称，の５個の呼び方について，a．頻繁に，b．ときどき，c．まれに，d．全くそう呼ばない，の４段階で評定するように求めた。

1. （お兄ちゃん，お姉ちゃん）a．が238人，b．が９人，c．が５人，d．は10人であった。
2. （名前で）a．７人，b．10人，c．14人，他はd．の回答。
3. （名前＋ちゃん）a．が７人，b．が15人，c．が５人，他は。d．。
4. （愛称）a．が８人，b．が11人，c．が12人，他はd．。

表１　回答者の出生順位と性別

	出生順位					性別		
	1	2	3	4	5	男	女	計
１人っ子	14					6	8	14
２人きょうだい	137	85				64	158	222
３人きょうだい	27	16	14			17	40	57
４人きょうだい	2	3	2	1		1	7	8
５人きょうだい	0	1	1	0	0	1	1	2
合　計						89	214	303

表 2　姉を「お姉ちゃん」と呼ぶ程度（2人きょうだい）

	弟	妹
a．頻繁に	42	66
b．ときどき	1	2
c．まれに	0	3
d．全くそうは呼ばない	6	1
計	49人	72人

$\chi^2=8.16$, df=3, $p<.05$

表 3　姉を「呼捨て」で呼ぶ程度（2人きようだい）

	弟	妹
a．頻繁に	2	0
b．ときどき	2	2
c．まれに	7	3
d．全くそうは呼ばない	38	67
計	49人	72人

$\chi^2=7.51$, df=3, $p<.05$

表 4　父親と母親が長子を「呼捨て」で呼ぶ程度

	父親				
母親	a．	b．	c．	d．	計
a．頻繁に	108	4	2	1	115
b．ときどき	46	37	3	0	86
c．まれに	12	7	9	0	28
d．まったく呼ばない	18	5	4	15	42
計	184	53	18	16	271

$\chi^2=171.187$, df=9, $p<.01$

5.（名前＋くん）a．がなし，b．が2人，c．1人，他はd．。

「その他」の欄に記入のあった回答は「名前＋ねえちゃん」4人，「姉坊」「略称」「おい」「あんた」が各1人などであった。

きょうだいの性別の構成の違いで，兄姉に対する呼び方に多少違いがあった。2人きょうだいのうち，いくつかの組合せで比較すると，表2のように，姉を「お姉ちゃん」とよぶ程度が妹よりも弟の方がやや少なく，「よび捨て」にする程度は弟の方が多かった（表3）。他方，兄に対して弟と妹の用いる呼び方に差は見られなかった。これは男尊女卑の傾向の名残りであろうか。

(2) 父母から長子の呼び方

表 5　父親と母親が長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶ程度

	父親				
母親	a．	b．	c．	d．	計
a．頻繁に	42	22	18	14	96
b．ときどき	5	37	19	29	90
c．まれに	0	0	19	16	35
d．まったく呼ばない	2	1	7	58	68
計	49	60	63	117	289

$\chi^2=171.87$, df=9, $p<.01$

表 6　父親と母親が長子を「名前＋ちゃん」と呼ぶ程度

	父親				
母親	a．	b．	c．	d．	計
a．頻繁に	14	4	1	19	38
b．ときどき	2	18	3	26	49
c．まれに	1	0	6	12	19
d．まったく呼ばない	2	0	1	171	174
計	19	22	11	238	280

$\chi^2=185.86$, df=9, $p<.001$

表 7　父親と母親が長子を愛称で呼ぶ程度

	父親				
母親	a．	b．	c．	d．	計
a．頻繁に	8	5	2	5	20
b．ときどき	0	10	2	7	19
c．まれに	0	3	3	3	9
d．まったく呼ばない	1	0	3	230	234
計	9	18	10	245	282

$\chi^2=242.736$, df=9, $p<.001$

質問2と3は父親と母親が上と同じ各呼び方で長子を呼ぶ程度を(1)と同じ基準で評定することを求めた。表4は父母の長子を呼び捨てで呼ぶ程度のクロス集計結果である。父親は67.90％が「頻繁に」この呼び方をしていたのに対して，母親では42.43％が同じ回答である。表5は父母が長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶ程度の回答である。母親の1/3が「頻繁に」，31.14％が「かなり多く」の回答であるが，父親では同じ回答は16.96％，20.76％である。表6は名前にちゃんづけで呼ぶ程度，表7は愛称で呼ぶ程度，表8が名前にくんづけで呼ぶ程度の父母のクロス集計結果である。

表 8　父親と母親が長子を「名前＋くん」と呼ぶ程度

	父親				
母親	a.	b.	c.	d.	計
a. 頻繁に	4	0	2	2	8
b. ときどき	0	4	0	1	5
c. まれに	0	1	0	3	4
d. まったく呼ばない	0	0	0	95	95
計	4	5	2	101	112

$\chi^2=157.9$, df=9, $p<.001$

表 9　父親と母親が長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶ程度（現在）

	父親					
母親	a.	b.	c.	d.	e.	計
a. いつもそう呼ぶ	4	3	2	1	2	12
b. かなり多く	2	19	9	9	9	48
c. ときどき	0	3	21	17	19	60
d. まれに	0	2	2	25	28	57
e. 全然そうは呼ばない	0	0	3	2	87	92
計	6	27	37	54	145	269

$\chi^2=229.17$, df=9, $p<.01$

その父母の子どものうちの一人である回答者が大学生となった「現在」の長子の呼び方については『現在はお父さん（お母さん）は，あなたがたきょうだいの一番上の人を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶことが有りますか？』と聞き，5段階で評定してもらった。表9がそのクロス集計結果である。父親は54%が「全く」そのような呼び方をしないのに対して，母親では全く呼ばないのは34％であり，残りの者は多少とも現在でも長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼んでいる。

以上，回答者の子どもの頃と現在と，父母の長子の呼び方に父母の差が顕著であったが，しかし各クロス集計表に見るように，父母の呼ぶ程度は相関している。つまり，片親がその呼び方を多くする家庭では，もう片方の親も比較的多く同じ呼び方をしていることが明瞭である。

ところで，きょうだいの中で弟妹が兄姉を呼ぶ仕方とその同じ人を彼等の父母が呼ぶ仕方に関連が有るだろうか。前回の調査でも，今回の調査でも弟妹からは「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶ仕方が圧倒的に多いので，この呼び方についてのみ弟妹と父母のクロス集計を行なってみた。表10は母親と弟妹が「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶ程度の関連が示されている。父親に関する回答との関連は有意水準にわずかながら達していなかった。母親の方が父親よりも子どもとの接触時間も長いし，心理的にも子どもとの距離が近い傾向が有ると思われるので，母親の方が長子の呼び方に相関が高いのは自然のように見える。

表 10　弟妹が兄姉を「お兄ちゃん/お姉ちゃん」と呼ぶ程度と彼等の母親が同様に呼ぶ程度の関連

	弟妹が兄姉を「お兄ちゃん/お姉ちゃん」と呼ぶ程度				
母親	a.	b.	c.	d.	計
a	87	1	0	0	88
b	81	4	0	2	87
c	29	0	3	1	33
d	45	5	2	10	62
計	242	10	5	13	270

$\chi^2=44.43$, df=9, $p<.001$

ところで，父母が長子を名前でなく「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶことを子どもはどう受けとめているのだろう。呼ばれる長子自身と弟妹たちで違いが有るのかも知れないが，今回は手初めとして次のような質問を試みた。

質問4は「あなたの子どもの頃，お父さん／お母さんが，あなたがたきょうだいの一番上の人を“お兄ちゃん／お姉ちゃん”と呼ぶとき，次のように感ずるときが有りましたか」というもので，3つの項目にハイ・イイエで回答を求めた。

a. きょうだいの中の兄／姉として尊重している
　ハイ（37.46%）　イイエ（46.64%）
　無答（15.90%）

b. 兄／姉としての責任感を期待している
　ハイ（52.30%）　イイエ（30.74%）
　無答（16.69%）

c. 兄／姉としての立場をいたわっている
　ハイ（24.73%）　イイエ（57.95%）
　無答（17.31%）

この場合の無答は単なる記入漏れのほかに父母がともにお兄ちゃん／お姉ちゃんという呼び方を全くしないので答えられないというものも含んでいた。項目のdとして「その他（　）」という欄を設け，そのほかに感じたことが有った場合に記入するように求めたところ，

「ききわけ良くしなさいということを要求していると感じた」（弟のいる女子）

「弟妹の手本になるように期待していると感じた」（4

表 11　夫が妻を「お母さん」，妻が夫を「お父さん」と呼ぶ程度

	夫					
妻	a.	b.	c.	d.	e.	計
a. いつもそう呼んだ	92	50	27	8	13	190
b. かなり多く	6	38	15	10	6	75
c. ときどき	0	3	14	5	4	26
d. まれにそう呼んだ	0	0	1	4	2	7
e. 全然そう呼ばなかった	0	0	0	0	5	5
計	98	91	57	27	30	303

$\chi^2=153.97$, df=16, $p<.001$

表 12　夫が妻を「お母さん」と呼ぶ程度の比較

	a.	b.	c.	d.	e.	計
祖父母同居／祖母同居家庭	57	35	19	7	16	134
祖父母同居しない家庭	37	42	30	19	11	139
計	94	52	49	26	27	273

$\chi^2=13.74$, df=4, $p<.01$

人きょうだいの長女）

「単に妹の真似をして呼んでいるだけ」（妹のいる男子）

「自分より先に生れていたんだなあ」（兄と姉のいる女子）

「単なる呼名に等しかったと思った」（姉と弟のいる女子）

「何にも思わなかった」（妹のいる男子）

などの回答があった。

(3) 夫婦の間での呼び方

質問5「当時，あなたのお父さんは，お母さんを『オカアサン』とか『ママ』あるいはそれに類似した呼び方をしたときが有りましたか」とたずね，そして，質問8は「当時，あなたのお母さんは，お父さんを『オトウサン』とか『パパ』あるいはそれに類似した呼び方をしたときが有りましたか」とたずね，5段階で評定することを求めた。ここには一人っ子家庭の回答も含まれている。クロス集計の結果は表11である。夫が妻を母称で呼ぶよりも，妻が夫を父称で呼ぶことの方が顕著であることと，この二つの呼び方に関連が有ることが示されている。

また夫または妻の親が同居している場合としていない場合で，この妻への呼びかけ方に差異が有るのではないか。前者の家庭では「お母さん」というと妻（子どもの母親）を指すだけでなく，夫の実母もしくは義理の母親（子どもの祖母）を指すことが可能なので，混同をさけるため妻の実名を多く呼ぶという傾向はないだろうか。回答者から見て，祖父母同居の家庭および祖母のみ同居の家庭の合計139軒と祖父母が同居しない家庭134軒と比較すると表12となり，核家族世帯の夫の方が妻を母称でよぶことが顕著であった（祖父のみ同居の家庭は現実に「お母さん」と呼ばれうる人物は一人であるという点では祖父母とも同居しない家庭と同じであるが，祖母が生前に同居していたとも考えられるので，核家族世帯とも同じとはいえないのではないか。そこでこの集計からは除くことにした）。

表 13　夫が妻を「お母さん」と呼ぶ程度と彼が長子を」お兄ちゃん/お姉ちゃん」と呼ぶ程度の関連

	長子を呼ぶ				
妻を呼ぶ	a.	b.	c.	d.	計
a	23	21	25	25	94
b	15	24	16	22	77
c	7	7	11	24	49
d	0	1	7	18	26
e	1	5	0	20	26
計	46	58	59	109	272

$\chi^2=48.31$, df=12, $p<.001$

次に二人以上の子どもの居る家庭について夫が妻をお母さんと呼ぶ程度と彼が自分の長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶ程度に関連が有るだろうか。妻を名前でなく，子どもから見た役割の名で呼ぶ人は子どもも下の子からみた役割の名で呼ぶ傾向があるかどうかということである。クロス集計の結果は表13である。最年少者から見た親族名称で呼ぶ傾向は妻に対しての方がより顕著ではあるが，二つの呼び方は高い関連が認められる。

(4) 兄・姉が弟／妹に対して自分を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と称する傾向

前の調査で家族と話しをするとき，自分のことをボク／ワタシという代りに名前や愛称で称することの有無を質問したところ，女子の回答の中に名前や愛称ではなくて「お姉ちゃん」と父母に対しても称するという回答が有った。ここではきょうだいの年下の者に対しての自称として親族名称を使用するという傾向に男女差があるかどうか検討する。質問6で「あなたがたきょうだいの一番上の人は，一番下の人と話すとき，たとえば“私がやってあげる”とか“私にも頂戴”というようなとき，僕／私という意味で“お兄ちゃん”／“お姉ちゃん”とい

表 14　兄姉が弟妹と接するとき自分のことを「お兄ちゃん/お姉ちゃん」と称する程度（子どもの頃と現在）

	子どもの頃		現在	
	兄	姉	兄	姉
1. いつも	7	30	3	23
2. かなり多く	11	39	8	25
3. ときどき	6	33	4	25
4. まれに	13	13	10	14
5. 全然無し	62	44	78	80
6. 覚えていない	9	8		
無答	4	3	9	3
合計	112	170	112	170

$\chi^2=41.01$, df=5, $p<.001$　　$\chi^2=26.35$, df=4, $p<.001$

うときが有りましたか」ときき，さらに「現在でも一番上の人は末の人に同じようないい方をしますか」とたずねた。3人以上のきょうだいの場合，長子がすぐ下の子と一番下の子と別な対応する場合が有り，回答が複雑になるので，ここでは末の子に対する言い方にしぼって回答を求めた。これらの質問に対する回答を長子が男か女かで分類して集計したものが表14である。子ども時代に関する回答で「覚えていない」というのは，そのようないいかたをしたことがあまり無いからこそ覚えていないのかも知れないが，この回答を入れて検定しても，入れないで検定しても結論は同じであった。両方とも明瞭な男女差がある。つまり長子が女の子の場合の方が男の子の場合よりも弟妹に向って親族名称で自称することが多い。なお長子が末子に「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と自称する程度の多い家庭ほど父母もその長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼んでいたことも認められた。

(5) 男の子がボクとよばれることについて

前回の調査で，きょうだい間でも，親が子を呼ぶ場合でも，男の子が「ボク」と呼ばれる例は多くなかった。しかし，主要な呼び方でなく，副次的な呼び方として使用する場合も有るだろう。今回は「あなたがたきょうだいの中の男の子が“ボク”と呼ばれたことが有りますか」と聞き，ハイ，イイエの回答とハイのときは（　）の中に呼んだ人が父，母，兄，姉，祖父，祖母およびその他を○で囲むよう求めた。きょうだいの中に男の子が居ない者はこの質問に該当しない。さらに無記入を除き，ハイかイイエに回答した者のみを集計したみた。ハイと回答した者は全体で30人で，そのうち2人が一人っ子であった。残りのきょうだい構成を分類すると，①上が女で下が男，②上が男で下が女，そして③男2人の兄弟の3つのタイプである。①のタイプでは26.8%がボクと呼ばれていたが，②では11.3%，③では2.8%であった。姉のいる弟の方が妹のいる兄，および男同士の兄弟よりも顕著にボクと呼ばれていた。呼ぶ者は祖母と母が最も多く，ついで父，祖父，姉の順に多く，兄が弟をボクと呼ぶ例は無かった。最年少者からみた親族名称で呼ぶという原則は，夫婦が互いに「お父さん／お母さん」と呼びあい，父母が長子を「お兄ちゃん／お姉ちゃん」と呼ぶことに典型的に現れているが，このボクについても同じようなことが言えないだろうか。男の子の下に弟妹がいるときは父母や祖父母は末の子と同じように彼を「お兄ちゃん」と呼ぶが，男の子が末の子のときは彼自身が自分をボクと呼ぶのと同じく，周囲の年長者も彼をボクと呼ぶことなのであろう。

全体的考察

上に掲げた仮説の1～6はほぼ実証された。欧米の家族が夫婦中心の家族であるのに対して日本の家族が子ども中心であることは最近の就寝形態やベビーシッターに関する母親の意識などの比較資料(篠田1990，岩佐1990)からもうかがえる。デヴォス（DeVos, 1973）は日本人の特徴として「役割に対する責任」が強烈であることを指摘している。イプセンの戯曲『人形の家』のノラに象徴されるように「一人の妻，一人の母親である前に，私は一人の女性であり，一人の人間である」という欧米の近代女性の意識とはまったく逆に，日本の女性は「自分は一個の人間，一個の女性である前に一人の妻であり，一人の母である」という意識が強いという。また「自己の役割から離れた独立した自分というものを考えることは伝統的に日本人の心情からは道徳的な逸脱あるいは罪の意識を生ずる」という。我が国には「子はカスガイ」ということわざが有るとおり，「子どもを持つ意味」について「家族の結びつきを強める」と認識している者が各国に比較して多く（総務庁青少年対策本部 1987, p. 155.），「夫婦にとって大切なこと」として「夫婦の間に子どもがいること」を挙げる者も顕著に多い（同本部 1982, p. 125.）。夫婦の間に離婚してもやむをえない原因があっても，離婚を思いとどまる理由は圧倒的に「子どもに及ぼす影響を考えて」が挙げられている（同書 p. 122.）。「夫婦2人だけでする行動」を見ると，「レストランで食事」，「社交パーティへの出席」，「旅行」等，いずれも欧米だけでなく，韓国の夫婦に比較してもはるかに少ない回答である（同書 p. 97.）。妻であることよりも子どもの母であることの方が重要であると受けとめ

られている。韓国でも日本と同じように，場合によってはそれ以上に子どもを大事にするけれども，あくまで親や祖先あっての子どもであるように見える（阪元1982)。また韓国では伝統的に幼い段階から大人の行動パターンを習得するようにしつけられる（全1990)。韓国の家族を大人中心の家族とすれば，日本の家族は子ども中心の家族といってよいであろう。また，我が国では大人が子どもの水準にあわせて接触しているようだ。幼児語がよく発達し，遅くまでその使用が許容されている。このような日本の家族関係の特徴が今回の調査結果に見るような家族の中での相互の呼び方と自称の仕方にも反映しているのではないだろうか。

谷（1981）は，自己中心的にしか世界を見ることのできない最年少の幼児が他者の適切な呼び方を習得しやすいように，周囲の大人もその子の立場から見た親族名称で各家族員を呼ぶことを示唆している。しかし，その子が十分習得したずっと後でも，父母が同じ呼び方を使用しつづけている事実はそれだけで説明がつかない。呼び方というのは一度決まると固定化すると同時に，その呼び方を許容する文化的背景があるからであろう。

文　献

1) 岩佐信道：育児態度の日米比較：ベビーシッターに対する母親の意識．日本比較教育学会第26回大会口頭発表，1990.
2) 大石初太郎：敬語．筑摩書房，1986.
3) 小川隆章：日本と韓国の青少年を取巻く人間関係の比較考察．関西教育学会紀要，**13**，126-130，1989.
4) 小川隆章：日本と韓国の家族の間での相互の呼び方と家族関係の比較．対人行動学研究会(編)，対人行動学研究，**10**（印刷中)，1991.
5) 言語生活編集部：妻は夫をどう呼ぶか．言語生活，**262**，48-53，1973.
6) 阪元一光：韓国社会における伝統的児童観．九州教育学会研究紀要，**10**，127-134，1982.
7) 篠田有子：コ・スリーピング—就寝形態に見る日本の家族像．現代のエスプリ『家族の風景』，至文堂，40-50，1990.
8) 鈴木孝夫：日本人の言語意識と行動様式，思想，**572**，242-253，岩波書店，1972.
9) 鈴木孝夫：ことばと文化．岩波書店，1973.
10) 総理府青少年対策本部：青少年と家庭——青少年と家庭に関する国際比較調査報告書．大蔵省印刷局，1982.
11) 総務庁青少年対策本部：日本の子供と母親——国際比較（改訂版．大蔵省印刷局，1987.
12) 全　玟楽：子ども観に関する比較教育文化的考察．大阪市立大学文学部教育学教室『教育学論集』，**16**，1-12，1990.
13) 谷　　泰：日本語の家族内呼称での最年少者について．民族学研究，**46**，315-329，1981.
14) 津留　宏：家族称呼から見た家族関係．教育心理学研究，4，12-20，1960.
15) DeVos, G. A.: *Socialization for Achievement; Essays on the Cultural Psychology of Japanese.* University of California Press, 1973.
16) 蓮実重彦：反＝日本語論．筑摩書房，1986.
17) Befu, H. & Norbeck, E.: Japanese Usages of Terms of Relationships. *Southwestern Journal of Anthropology*, **14**, 66-86, 1958.
18) Fischer, J. L.: Words for Self and Others in some Japanese Families. *American Anthropologist*, **66**, 115-126, 1964.
19) 南不二男：敬語．岩波書店，1987.
20) 森本哲郎：日本語・表と裏．新潮社，1988.
21) 渡辺友左：家族の呼び方——都内のある職場でのアンケート．言語生活，**143**，42-49，1978.
22) Yang, Wondal: *Korean Ways, Korean Mind.* Tamgu-Dang（探求堂)，ソウル，p. 41，1986.